

なぜ沈黙のない自然会話ができるのか？ — 予備的考察 —

有元光彦*・Ta Thanh Huyen**

Why Is it Possible to Have Natural Conversation Without Silent Pauses? :
A Preliminary Study

ARIMOTO Mitsuhiko*, Ta Thanh Huyen**

(Received September 25, 2020)

1. はじめに¹

本稿の目的は、沈黙が一度も現れない自然会話を対象とし、なぜ沈黙が現れないのか、沈黙の代わりに機能を担っているものがあるのか、さらには自然会話にとって沈黙とは何か、といった問題に予備段階として解答することにある²。

Ta Thanh Huyen (2020: 14) では、沈黙を次のように定義している。

(1) 「沈黙」の定義：

沈黙とは、発話者が1秒以上4秒未満発話していない状態を指す。ただし、生理的な音声や動作音を伴う無言状態、つかえにおける無言状態、そしてポーズは、沈黙とは捉えない。

この定義に基づいて、Ta Thanh Huyen (2020) では、若年層(20代)どうし、及び老年層(60代)どうしの14組(いずれのペアも友人関係)の自然会話における沈黙の出現状況が分析されている。その結果、次のようなことが判明した。

- (2) a. 統語的には、沈黙は文と文の間に出現する。
- b. 意味・機能的には、沈黙は順接的推論を表す。

(2a)の「文」は、文だけではなく、独立性の高い節のような、いわゆる「文らしい」ものも含まれる。また、(2b)に関しては、「少なくとも逆接の意味・機能は

持たない」と言った方が正確かもしれない。いずれにせよ、沈黙は、従来の研究のように意味・機能だけではなく構文的にも特徴が見られ、しかも意味・機能においては、先行研究で述べられているほど様々な意味・機能を担っているわけではなく、理論的には限定的なものとして考えることができる。

以上のTa Thanh Huyen (2020)による研究から判明したことの大きな結論の1つは、「自然会話には必ず沈黙が出現する」ということであった。ところが、そこで収集された会話データの中で、ある1組の老年層どうしの会話だけには沈黙がまったく出現しなかったのである(cf. Ta Thanh Huyen 2020: 234-235)。この会話データにはなぜ出現しないのだろうか。

もちろん、沈黙が出現する統語環境にフィラーや笑いが出現することはある。(3)ではフィラー「あのう」が出現している。

- (3)
- OF2000060C 常温で置いとったらいいいんわねー
- OF2000061H 常温で置いておいたほうがいいよ、[なぜかというと]、あのう、こうじは
[あったかくなると、なんと
- OF2000062C [ああ、
そうか]
- [ん、ん、ん] ん

しかし、この「あのう」(下線部)は沈黙と同じ統語

* 山口大学国際総合科学部

** 山口大学大学院東アジア研究科コラボ研究特別推進体研究員

¹ 本稿の会話データは、Ta Thanh Huyen (2020)で収集したものを利用している。データ収集に協力してくださったイン

フォーマントの皆様に深謝する。

² ここで言う「自然会話」とは、調査者が関与やコントロールをしていない会話という意味である(cf. 2節)。

環境に出現しているというだけであって、順接的推論という意味・機能を持ってはいない。従って、「沈黙の代わりにフィラーや笑いが出現する」とは言えないだろう。

それでは、なぜ沈黙が出現しない自然会話があるのだろうか。何か別の問題が関係しているのではないだろうか。それを解明することが、本稿の目的である。

2. 言語データ

本稿で対象とする会話データは、Ta Thanh Huyen (2020) で扱った「OF7」と呼ぶものである。60代の女性どうし (SさんとTさん) の対面会話 (30分) で、2018年7月に収録している。この対面会話には調査者は参加 (同席) していない。また、会話の内容についても、調査者は何も提示していない。

本稿で挙げる会話データでは、左端に「OF7000001S」のような記号列を挙げることによって、当該話者の発話を示している。記号列のうち、「OF7」は会話データを、次の6桁の数字は発話番号を、右端のアルファベット記号は発話者をそれぞれ示す。また、会話部分では、次のような記号を使用する (cf. Ta Thanh Huyen 2020: 23)。

,	1秒以下の「間」につける。
…	発話中、発話末に関係なく、音声的に言いよどんだように聞こえるものを示す。
(???)	聞き取れない部分を示す。
[二人以上の発話や音声が重なり始めた時点を示す。
]	発話や音声の重なりが終了した時点を示す。
=	2つの発話が途切れなく密着していることは、等号 (=) で示される。
(文字)	聞き取りに確信が持てない部分を示す。
《沈黙 数字》	「沈黙」の直後の数字は、沈黙の秒数を表す。例えば、「《沈黙3.00》」は3秒間の沈黙を表す。
< >	笑いながら発話したものや笑いを示す。
[説明]	漢字の読み方や状況などの説明を示す。
↑	イントネーションが上昇するときに示す。
&	同時発話を表す。例えば、「I & O」は話者Iと話者Oの同時発話を示す。

もちろん、すべての記号が本稿で挙げる会話データに現れるわけではない。

3. 分析

分析のアプローチとして、(2) で挙げたように、沈黙と同じ統語環境に出現し、しかも順接的推論を表すところを見つける必要がある。そこで、沈黙が出現する可能性のある位置の直前にある文のパターンによって分類して観察することにする。

3. 1. 従属節

本節では、沈黙が出現する可能性のある位置の直前が従属節であるパターンを示す。本稿で対象とする会話データでは、このパターンが最も頻度が高い。

3. 1. 1. 動詞テ形

本節では、沈黙が出現する可能性のある位置の直前に動詞テ形が現れるパターンを観察する。例えば、次の会話データを見られたい。

(4)	OF7000003S	今日ちょっと暑いですね、[台風、どうでした [台風、昨日
	OF7000004T	[はい
		[そうです、うん、お野菜がね、うん、 <u>[垣根が倒れてね、[弱ったいね</u>
	OF7000005S	[(弱かったね) [わたしも、(垣根)が倒れちゃったけど、直すのが[たいぎでね、今日みんなマルチがとんでから

(4) の下線部を見ると、「垣根が倒れてね」も「弱ったいね」もいずれも文である。しかも、「垣根が倒れた」という命題と「弱い」という命題は順接的推論の関係にある (少なくとも逆接の関係ではない) と考えられる。これらのことから、「垣根が倒れてね」と「弱ったいね」の間に沈黙が出現する環境が整っていることになる。しかし、実際は沈黙は出現していない。もちろん、沈黙の出現は随意的 (optional) であるので、出現環境が整ったからといって必ずしも出現するとは限らない。

しかし、同様の出現環境は他にも見られる。(5) を見られたい。

(5)	OF7000038T	昨日台風じゃから、みなのかてたの
	OF7000039S	うんうん、[(そうなんですか)
	OF7000040T	[でも、のけたけど、横に置いとるから、 <u>それをまたあれして、</u> [びらーんてね

OF7000041S [うーん びらーんてね

(5)では「それをあれした」という文と「びらーんてね」という文が順接的推論の関係で連続している。しかも、(4)の「倒れて」と(5)の「して」はいずれも動詞のテ形であるという点も共通している。従って、ここでも同様に沈黙が出現する環境が整っているが、やはり実際には出現していない。

なぜ(4)、(5)では、出現環境が整っているにもかかわらず、出現しないのであろうか。沈黙の出現は随意的なので、(4)、(5)ではたまたま出現しなかっただけなのだろうか。それとも、何らかのルールが働いたために、出現しなかったのだろうか。

これらの問題を解明するために、(4)、(5)における共通点を探ってみる。そうすると、沈黙が出現する可能性のある位置に「発話の重なり(オーバーラップ)」が現れていることが分かる。例えば(4)では、「弱ったいね」の箇所でオーバーラップが起こっている。(5)では、「びらーんてね」の箇所でオーバーラップが起こっている。いずれも沈黙が出現する可能性のある位置からオーバーラップが起こっている。(4)、(5)の相違点は、(4)で沈黙が出現する可能性のある位置で話者Sが発話権を取ってしまい、会話を継続している点である。(5)では、沈黙が出現する可能性のある位置では「うーん」と発話しただけであり、発話権は取っていない。話者Tの発話が終了した直後に発話している。従って、厳密に言うと、(5)の「うーん」は相槌であり、オーバーラップではないかもしれない(以下の(9)における議論を参照のこと)。

(4)、(5)は、沈黙が出現する可能性のある位置の直前に動詞テ形が来ている統語環境の場合であるが、同じ統語環境を持つ会話データは他にもある。

(6)

OF7000015S ほいでマルチが飛ぶと、[マルチ止めのところから裂けてね、[(ほとんど)

OF7000016T [ん
[そうです、じゃけ、
またやりかえなきゃいけん[でしょ、
あれが[大変よね

(7)

OF7000141S (あるある)するて言う、ね、[そういう気持ちに絶対なってよね、じゃけん、難しいよね、[(買える時が)

OF7000142T [うーん
[最近ちょっとね、顔みながら

あげたらええんじゃけど、でも、また持って来て、[でも、豆子郎好きではあるんじゃけど、ふふふ[ふふふふふ<笑い>

OF7000143S [(また来てあげる)
[ふふ<笑い>、
(あるげどね)、まあ、その人も絶対もらったと(思わん)とかね、[あげてなら、言うてならいつて(???)

(8)

OF7000541S でも、それら、ほんと今(思う)印象に残ってね、[楽しい思い出みたいになってしもうて

OF7000542T [うん、うふふ<笑い>、
帰ってね、[(記憶)の中にね

OF7000543S [(???)残ってね、
[ふふ<笑い>

OF7000544T [インプットさ
れているから

(9)

OF7000511S 動けんからね

OF7000512T うんうん

OF7000513S しょうがないと思って [(???)

OF7000514T [あー、そうなん
じゃ

(6)では、「マルチ止めのところから裂けてね」という文の直後に沈黙が出現する可能性のある位置があるが、そこでは話者Tが「そうです、じゃけ、またやりかえなきゃいけんでしょ」と発話している。話者Sは「(ほとんど)」と発話しているが、これは、話者Tが発話権を取ったために、発話が途中で途切れたものと捉えることができるかもしれない。(7)では、「また持って来て」という文の直後に沈黙が出現する可能性のある位置があるが、ここでも話者Sが「(また来てあげる)」を発話している。そのため、話者Tの「でも、豆子郎好きではあるんじゃけど」と発話が重なっている。(8)では、「帰ってね」という文の直後が沈黙の出現する可能性のある位置であるが、やはり話者Sの「(???)残ってね」が話者Tの「(記憶)の中にね」と重なっている。

次に(9)であるが、これは(4)～(8)とは様相が異なる。「しょうがないと思って」という文の直後が沈黙の出現する可能性のある位置であるが、そこで発話されたのは「あー、そうなんじゃ」である。(4)～

(8)では聞き手の発話は命題を含む文であった。しかし、(9)では応答詞(相槌)を含む文である。しかも、この文によって発話権を取っているわけではない。(9)と同様のパターンは非常に多く観察されるが、このパターンは沈黙の問題とは無関係である可能性が高い。

3. 1. 2. 動詞+から

本節では、沈黙が出現する可能性のある位置の直前に、動詞に接続助詞「から」が後続する形が来るパターンを挙げる。次の会話データを見られたい。

- (10)
- OF7000439S て言うのは、まあ、帰って、よかったかな
なっ [ちゅう、(おう、ああいう) 絶対長い
間じゃあ、ずーといろんな話しちよつ
ても
- OF7000440T [あー
毎回行きよってやろうからね、[(每回行
きよりやろう、ほとんど)
- OF7000441S [(話しち
よる) ー
あー、たいてい
言ってますーね

(10)では、「毎回行きよってやろうからね」という文の直後に沈黙が出現する可能性のある位置があるが、ここで話者Sの「(話しちよる)」が重なってくる。

3. 2. 終助詞「ね」

本節では、沈黙が出現する可能性のある位置の直前に終助詞「ね」があるパターンを示す。次に会話データを挙げる。

- (11)
- OF7000173S ね、でね、お金もやっぱりやっぱしかけて、
ちゃあんとね、[虫よけやら覆いやら
- OF7000174T [うんー、そりゃあ、
ちゃんとハウスやらも [きれいに作っ
ちよって、うちらはそうじゃなくて、年
よりに
- OF7000175S [きれいに作っ
てね
うんー

- (12)
- OF7000185S うん、 [(法人)
OF7000186T [じゃけえね、うん、田んぼもね、

[すごいんよ

- OF7000187S [大変(だね)、あれも大変でしょ、よう、
今度はとうじんは法人になったさ、いい
けど、それをやって人がね、だんだんだ
んだん(???)

(11)では、「ちゃあんとね」の直後に沈黙の出現する可能性のある位置があるが、そこで話者Tは「うんー、そりゃあ、ちゃんとハウスやらもきれいに作ちよって」という発話を重ねている。また、(12)では「田んぼもね」の直後で、話者Sの「大変(だね)」が重なっている。

なお、「ちゃあんとね」「田んぼもね」のいずれも、終助詞「ね」が付くことによって、句である「ちゃあんと」「田んぼも」が文に近い(文らしい)言語単位となっている。

ところで、(12)では「田んぼもね」を文と捉えず、「田んぼも」という句と捉えることもできるかもしれない。この場合、副助詞「も」が付いているため、これが問題であると考えられるかもしれない。しかし、同じように副助詞が付く会話データを見てみると、副助詞「も」によっては説明することが難しいと分かる。次の会話データを見られたい。

- (13)
- OF7000173S ね、でね、お金もやっぱりやっぱしかけて、
ちゃあんとね、[虫よけやら覆いやら
- OF7000174T [うんー、そりゃあ、
ちゃんとハウスやらも [きれいに作ち
よって、うちらはそうじゃなくて、年よ
りに
- OF7000175S [きれいに作ってね
うんー

(13)では、「ちゃんとハウスやらも」というように副助詞「も」が現れている。しかし、この直後は沈黙が出現する可能性のある位置ではない。すなわち、順接的推論の関係にはなっていない。しかも、副助詞「も」の直後にはポーズさえも見られない。ただ、話者Sの「きれいに作ってね」という発話が重なっていることは気になる。しかし、ここではそもそも沈黙が出現する可能性のある位置ではないため、(12)を副助詞の問題として記述することはできないだろう。

3. 3. 文

3. 1, 3. 2で挙げた会話データでは、沈黙が出現する可能性のある位置の直前に従属節や文らしいものが

来ているパターンであった。完全な文が来る会話パターンはないのだろうか。本稿が対象とする会話データでは、次の一例のみが観察されている。

- (14)
OF7000196 50代, なんか, 一人くらいくしかおっ
ちゃらん, [そのなかでやるんじゃから
OF7000197S [(? ? ?) だからね

(14) では、沈黙が出現する可能性のある位置の直前にある「一人くらいくしかおっちゃらん」は文である。その直後の位置では、話者Sの「(???)だからね」によるオーバーラップが見られる。

3. 4. 考察

以上より、沈黙の出現する可能性のある位置の統語環境をまとめると、次のようになる。記号一が、沈黙の現れる可能性のある位置である。

- (15) a. 従属節（動詞テ形）一文
b. 従属節（「から」）一文
c. 文らしい（「ね」）一文（文らしい）
d. 文一文

沈黙が出現する可能性のある位置が含まれている会話データは非常に少ないが、その中でも(15a, b)の頻度が比較的高い。(15a, b)は、南(1974)の分類によると、それぞれB類, C類である。これらは、従属節の中でも比較的従属度が低い、すなわち独立性が高いため、文に近い言語単位であると考えられる。言うまでもないが、このことは、沈黙が出現する可能性のある位置を観察していったので、沈黙が出現する可能性のある位置の前後には統語的に文(文らしいもの)が現れる当然である。問題は、その位置に、沈黙ではなく、オーバーラップがあるということである。

高木ほか(2016: 72)によると、「重なりが体系的に生じるのは、TCUの完結可能な点、つまり、TRPの周辺に集中している。」とある³。このことから、沈黙が出現する可能性のある位置はTRPであることは予測できる。しかし、TRPは、沈黙やポーズ、オーバーラップ、あいづち、感動詞類など様々な要素や現象が起こる場所である。しかも、それらの生起は任意である。このような性質を考えると、今回の会話データでは、なぜTRPにオー

バーラップしか起こっていないのが問題である。

もう一つ問題がある。Ta Thanh Huyen (2020) では、沈黙の研究結果として(2)を得ている。(2a)は、TRPと類似の場所を示しているが、ただその文脈に現れるTCUは文に限られている点で、厳密にはTRPの一つの現れと考えられる。また、(2b)については、これもTRPの一種かもしれないが、やはり非常に限定されている。従って、TRPにどのような要素や現象が現れるのか、またそれらの要素や現象の間にはどのような関係や分布があるのかなどについては、さらに検討が必要であろう。

本稿では、その検討の一つとして、沈黙とオーバーラップとの関連性を探っているという位置づけになる。現時点では、結果として、次のように記しておくしかない。

- (16) 沈黙が出現する代わりに、(15)のような統語環境ではオーバーラップが出現することもある。

ただし、この記述でも不十分である。なぜなら、今回の会話データでは沈黙が「一切出現しない」からである。少しでも沈黙が観察されるならば、(16)のように記述してもよいかかもしれない。しかし、任意である沈黙の出現が全くないという事実は、どのように考えればよいだろうか。もし沈黙とオーバーラップが、特定の統語環境において相補分布になっているのであれば、そこには何らかのルールが存在することになる。しかし、現時点では会話データが不足しているため、十分な検証には至ることができない。

もちろん、話者の問題もあるかもしれない。残念ながら、今回の会話データの参加者であるS, T氏による別の会話データは収集できていない。今後、収集の機会を待つかない。

4. 議論

本稿では、沈黙が出現する可能性のある位置にオーバーラップが現れることから、沈黙とオーバーラップとは相補分布の関係にあるのではないかと仮定した。しかし、その条件については、(15)の場合としか言うことができていない状態である。

そもそも、もう少し沈黙について考察する必要があるのではないだろうか。会話の途中で「誰も話していない」状態を「間合い(silence)」と呼ぶのであれば、それには様々な種類のものが存在している。例えば、「休

³ TCU, TRPは、Sacks, Schegloff & Jefferson (1974) で提案された用語である。TCUは「順番構成単位(turn constructional unit)」であり、会話の順番を構成する最初の単位である。これは、どのあたりで、どのような形で終わりそうであるのかを受け手が予測できるような構造を持っている。単語や文などの

様々な文法的単位がこれに相当する。TRPは「順番の移行に適切な場所(transition relevance place)」であり、TCUの完結可能な点(possible completion point)である。話し手以外の参加者が順番を取って話し始めてもよい場所である(cf. 高木ほか 52-53)。

止 (pause)] はTCUの途中で話者が生み出している間合いである。その他にも、順番を取った話者が発話をしていない (あるいは発話を遅らせている) 「顕著な間合い (noticeable silence) 」や、次の順番を自己選択した話者が発話し始めるまでの「切れ目 (gap) 」, そして誰も次の順番を自己選択しない場合に起きる「中断 (lapse) 」が観察される (cf. 高木ほか2016: 79-82)。高木ほか (2016: 82) には、「会話の中で生じる間合いは、順番交替システムとの関連で理解すると、ランダムなものではなく、相互行為の組織においてどのような位置づけにあるものが厳密に捉えられる」とあるが、これらの様々な間合いどうしの関連性や分布などについては述べられていない。しかも、ここでの記述を見る限りでは、間合いの時間の問題は考慮されていないようである。

Ta Thanh Huyen (2020) では、(1) のように、時間を基準として沈黙 (silence) を定義づけている。ここでは、基本的に一人の話者の発話に中での間合いを対象としているため、高木ほか (2016) の言う「休止 (pause) 」に相当するが、しかし「ポーズ (pause) 」とは区別をしている。すなわち、Ta Thanh Huyen (2020) では、休止の中に、相対的に間合いの時間が長い沈黙 (silence) と、短いポーズ (pause) という2つの下位分類が存在していると考えていることになる。そこで、沈黙とポーズの関係を考えてみよう。

沈黙には、Ta Thanh Huyen (2020) によると、(1) のような時間的な違いだけでなく、沈黙には(2) のような統語的、意味・機能的な制限があることが判明している。ポーズも沈黙と同様に休止というカテゴリーに含まれるのであれば、ポーズにも沈黙と同様の制限を持っている可能性がある。TCUやTRPは会話の参加者が予測できるようなものであるとすると、TRPに比較的長い休止がある場合には予測が立てやすく、しかも順番交替も容易である。一方、比較的短い休止の場合は、話者の脳内での情報処理の時間が短く、したがって予測が立てにくくなる。しかし、通常の会話においては、どんなに休止が短くてもTCUやTRPが予測できないということはないだろう。それが可能だということは、“デフォルトの状態” というものが存在するのではないかということが考えられる。例えば、次のように考えられないだろうか。

(17) TCUは、デフォルト状態として順接的推論の関係で並んでいる。

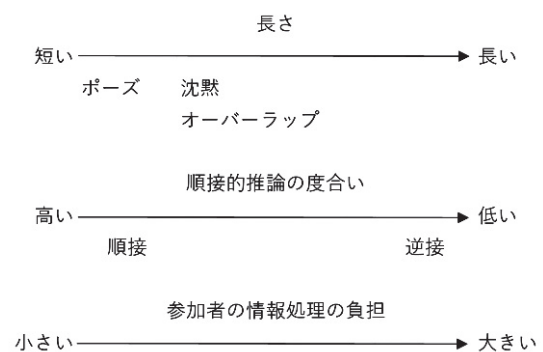
会話の中でTCUが順接的推論の関係で連続していれば、参加者には特別な情報処理は必要なくなる。しかも、休止が短くなればなるほど、順接的推論の程度は増すと考えられる。従って、ポーズが出現する位置では、例えば逆接的なものが出現する可能性は低いのではなからうか。もしポーズのような短い休止が出現する位置で逆接的な関係を作ろうとするならば、例えば接続詞「でも」を用いるなど顕著な逆接を構築するしかないだろう。

逆に考えると、休止が長くなればなるほど、順接的推論の関係が崩れることになる。Ta Thanh Huyen (2020) の沈黙の場合は、まだ順接的推論の関係が保持されているが、この沈黙より長い場合、すなわち4秒以上になる場合は、順接的推論だけではなく、逆接も自由に出現し得ると考えられる。

以上の考え方は、休止を離散的に考えるのではなく、連続的に捉えようとする試みである。このような考え方に基づいた記述装置が有効であるかどうかは、今後の検証を待つしかない。

それでは、休止とオーバーラップとの関係はどのようなものであろうか。オーバーラップは、今回の会話データでは、ほとんどが沈黙の出現する可能性のある位置に現れていて、ポーズが出現する位置にはほとんど見られない。そうすると、オーバーラップは参加者の情報処理の負担がかなり大きいということになろう。情報処理を行う時間もそれだけ必要であろう。何をどのように発話するか、またいつしゃべり始めるかといったことも計算しなければならない⁴。このように考えていくと、オーバーラップも、沈黙と同じ機能を果たしていると考えられる。

以上の議論をまとめたものを【図1】に挙げる。



【図1】 休止とオーバーラップの関係

【図1】では、現時点では沈黙とオーバーラップを同じ位置にしているが、何も発話されない「長さ」が短い

⁴ この点から考えると、TCUの完結可能点だけが重要ではなく、休止 (あるいは間合い) 直後のTCUの開始可能点について

も考慮する必要があるかもしれない。

ほどオーバーラップは起こりやすいと考えると、長さスケールのもう少し左側まで範囲が及んでいるのであろう。

休止とオーバーラップが同様の機能を果たすと前述したが、一見相違点に見える特徴もある。それはオーバーラップが発話権と関係があるということである。オーバーラップは、聞き手が最終的には発話権を取るようになる。(6)はその典型例である。そうすると、沈黙は発話権とは関係ないのだろうか。Ta Thanh Huyen (2020) では、沈黙の直後に発話権が交替する場合は分析対象から外しているが、今後の課題としては明記している (cf. Ta Thanh Huyen 2020 : 243)。沈黙の直後に発話権が交替している会話データがあるということは、沈黙の直後では聞き手が発話権を取ることが可能であることを示している。ただ、発話権を取ることができるのは、沈黙の「直後」なのか、それとも沈黙の「途中」でも良いのか、という点については明らかではない。直観的に考えると、沈黙のような比較的長い間合いがある場合には、聞き手（話し手でもあるが）はいつ発話を開始しても良いはずである。いわば、話し手が沈黙を使用することによって、聞き手に発話権を譲っているように見える。しかし、ひょっとすると、沈黙の途中で聞き手が発話を開始するような会話データは存在しないのかもしれない。そうすると、沈黙は話し手の発話権に属することになる。ただ、聞き手の発話がある場合でも、それが沈黙の直後に発話されたのか、沈黙の途中で発話されたのかを区別することは非常に難しい。沈黙の途中と言いながら、ポーズの直後かもしれない。沈黙の定義が改めて問われることになる。

5. おわりに

本稿では、沈黙が全く出現しない会話データを対象として、そこに沈黙の代わりになるような要素や現象が現れていないかについて考察した。しかし、会話データ量そのものが非常少ないため、(16)のような仮説しか立てられなかった。すなわち、沈黙とオーバーラップには相補分布を成している可能性があるが、出現する統語環境は基本的に同じであり、しかも意味・機能的にもほぼ同じであると仮定できる。

今回は、同じ話者の別の会話データを収集していないため、会話相手の違い、特に属性の違いがどのように影響するのかという点については、何も考察できていない。そのため、本稿は純粋に言語内に説明を求めたものとなっている。言うまでもなく、言語外的な要因の追究は今後の課題である。

最終的には、熟した結論には至らず、問題ばかりが残った。今後は、会話データを増やし、沈黙について再吟味したうえで、ポーズや感動詞類などの様々なカテゴリーとの関連性を追究する必要がある。

参考文献

- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』大修館書店
- Sacks, Schegloff & Jefferson (1974) A Simplest Systematics for the Organization of Turn-Taking for Conversation. *Language* 50, pp.696-735.
- 高木智世ほか (2016) 『会話分析の基礎』ひつじ書房
- Ta Thanh Huyen (2020) 『日本語談話における沈黙に関する研究』山口大学大学院東アジア研究科博士論文